

航空

南洋群島玉碎地

海軍航空隊兵器整備

広島県 福原 一二

私は広島県双三郡上杉村字廻神という所で、父寛一の三男として、大正十二年七月七日出生しました。兄一人、姉二人、妹二人、弟一人の農家でした。昭和十六年十二月八日、大東亜戦争勃発となり、海軍へ志願しようと思っていました。父は本人の意志に委すと言ってくれました。

昭和十七年九月一日、大竹海兵団の第一期生として入団しましたが、呉海兵団の分遣隊としてでした。大

東亜戦争開戦から一年に満たない時でしたが、広島県には呉鎮守府があり軍港もあるし、江田島海軍兵学校、海軍工廠もある。日清・日露戦争が始まったときに広島に大本営が置かれたという環境が、私の心を志願へと思い立たせたのかもしれませんが。

家の近所には入団した仲間はいなく、私一人でしたので役場の方に付添いで連れて行ってもらいましたが、その方は私より三歳上で現在も健在であります。入団すると適性検査があり、航空整備兵となり、仲間は二個分隊で八十人くらいいたのではなかったかと記憶しております。

海軍には携帯の履歴表というのがあり、本人の履歴が記入されております。私の履歴を読みます。

◎注意 一、本表ハ丁寧ニ保存シ汚損セザル様取り扱フベシ 二、本表ハ現役中所屬分隊長（分隊長ナキトキハ下士官兵ノ人事ヲ取り扱ウ者）ニ於イテ保管シ其ノ所屬ヲ変更スルトキハコレヲ新所屬ノ分隊長ニ送付スルモノトス 三、本表ハ婦休ヲ命ゼラレ若ハ現役ヲ離ルトキハ本人ニ付与シ服役中保持セシムルモノトス 四、五、本表ハ召集及簡閲点呼ノ時ハ持参スルモノトス

（海軍の分隊長は陸軍では中隊長）

特技章 昭和十九・六・五 普通科兵器整備術章

（射爆） 二十・六・十 高等科兵器整備術章（射爆）

船舶部隊内配置並ビニ潜水技術ニ対スル経歴

十八年二月〜十九年一月 九五二空 飛行機整備員

十九年一月〜十九年六月 州ノ空 普通科兵器整備

術（射爆）練習生 十九年七月〜二十年一月 二五二

空 零戦射爆班員 二十年一月〜二十年六月 州空空

等科兵器整備射爆練習生

（主な履歴のみ抜粋）

昭和十七年・九・一 大竹海兵团 十二・十五 海

軍一等整備兵 第九五二海軍航空隊ニ転勤 自十八・

一・五至十九年 南洋群島戦務甲 十八・十一・一海

軍上等整備兵 十九・一・五 第二十五期普通科兵器

練習生（射爆）トシテ州崎海軍航空隊入隊 五・一海

軍整備兵長 六・五第二期普通科兵器整備（射爆

甲小型機）練習生教程卒業 同日戦闘三二六飛行隊付

自六・五第三〇一空にて戦務甲 自六・二九至七・

一四第三〇一空ニテ小笠原諸島方面戦務甲 七・一〇

戦闘第三六飛行隊ハ第二五二海軍航空隊ノ指揮下ニ入

ル退隊（即日南方諸島空仮入隊） 同日第三航空艦隊

ニ編入 八・二〇硫黄島ヨリ木更津基地ニ復帰 自七

・一〇至八・二〇 二五二空ニテ小笠原諸島方面戦務

甲二十・一・十 戦闘第三二一飛行隊付 一・二十一

第二十七期高等科兵器（射爆甲）整備練習生トシ州

ノ崎海軍航空隊入隊 自十九・八・二十一至二十・一

・二十 第二五二空ニテ戦務乙 五・一 任海軍二等

整備兵曹 六・十 第二七期高等科兵器整備術（射爆

小型機）練習生教程卒業 同日 第一三二海軍航空隊

付 自二〇・一・二一至六・九 州崎空ニテ戦務了

八・三一 海軍一等整備兵曹 九・三一 香取海軍航空基地ニテ停戦 十二・二〇 残務整理（引渡シ）復員ス

昭和十八年一月五日より、南洋群島戦務甲の状況の概要を次に申し述べます。

南洋群島へ行つて、クエゼリン、ルオットは本隊で、タワラ・マキン（玉砕した）が分遣隊、そこには大体十二〜三機しか常駐していない。それは偵察機とか、戦闘機。この輸送は日本海軍では特務艦だった。艦とかが輸送船ですね。艦の性能は余り良くない。速度は遅い、潜水艦から魚雷を受けて「の字運動」をする。「の」の字を書くように進路を敵にまぎらわす。ジグザグで、こちらへ行くのかと思つたらあちらへ行く、という航法で潜水艦の雷撃をかむ。

敵の潜水艦が痛でした。食料も特務艦が運んだが、飛行機の方は補給がつかない。やられればやられっぱなし、どんどん戦力は無くなってしまふ。マキンは玉砕したが我が軍の本当の最前線です。この地区が玉砕

したので、クエゼリンからトラック群島へ来て編成し直しました。

私は昭和十九年一月に州崎海軍航空隊に普通科兵器術練習生（射撃・爆撃）として入隊をし教育を受けました。

六月五日、戦闘第三一六飛行隊付となつて、第三〇一航空隊で戦務し、二十九日から小笠原諸島で戦闘するのですが、連合軍航空機が来襲するのでこれと戦うやられた我が航空隊が帰つてきて、整備して編成し直してまた出撃するということもある。そしてニューギニアへ行こうとしたけれど、すでにトラック島などの状況が悪くなつていた。そして硫黄島へ行つた。サイパンへはもう行けずです。硫黄島はほとんどが海軍でした。私たちは硫黄島の基地にいて艦砲射撃を受けたが、米軍が上陸する前に、飛行場もやられ（設営隊がいたが）、飛行機（陸攻機）で帰つて木更津基地に復帰しました。八月二十日です。

そして小笠原ですが本土、地元へ帰つて来ました。タワラ・マキン玉砕以来ずうっと、本隊クエゼリン・

ルオット・トラック島と引き下がった。親は、自分の子供がどこで死ぬのか、どこで死んだか分からない。航空隊は番号だけで、それがどこに居るのか、どこで戦っているかも分からない。例えば、呉気付〇〇空とあるが〇〇は数字で地方が書いてない。親としては心配だったことでしょう。

私の基地は横須賀です。我々は三人か四人かが衣囊（中に衣類を入れた布の袋）を担いで転動するのです。陸軍は部隊行動だから分かりますが、海軍はちよっと違うのです。

例えばクエゼリンの戦闘状況というと空襲がほとんどです。我々は手が出せぬが、陸軍警備隊、海軍防備隊がそれぞれ配備に付く。被害が大きくなる。島の椰子の木は皆無くなってしまう。バンバン上からやられるからです。私らは防空壕（鉄扉）に入っているが、（二〜三十人ぐらい入れるが）、直撃爆弾では穴があいてしまうこともある。玉砕する前に逐次撤退するが、我々は飛行機がなくなってしまうえば仕方がないので、飛行機の有る基地へ退く。飛行機の補充がないのだから、

ら、自然に撤退の命令が出るわけである。

私も死のうかと思ったが、我々は手榴弾一発もっていない、武器を持っていない、あるのは工具だけ。飛行機しかない。搭乗員は飛行機がなければ何もやることがない（フィリッピンの末期には航空機関銃を外して山の中へ入った）。結局戦っている方は戦っても、武器持たぬ我々は戦えない。そんなときは「自分の親は今ごろどう思っているのだろうか」など考えていました。その気持ちはつらい。高等科練習生時に「これからはサイパンかな」などと親にも言っていました。

零戦の胴体に三〇ミリ砲を付けるため内地に帰り、豊川の海軍工廠へ行ったとき、学徒動員の女学生に親元へ手紙（をどこにしている、どこへ行く、など）頼んだこともある。そういう女学生とも文通なども続けました。当時は女学生（二交代・三交代）で鉢巻きをしていました。今でも文通はありますし、戦後も広島で昔話をしたこともあります。

零戦の三〇ミリ機関砲で海防艇あたりだったら穴を開けられる。一人搭乗だから、機関銃で敵と対戦した

り、座席の下の三〇ミリ機関砲の徹甲弾で海上の艦艇を撃つのです。操縦とグラマンとの戦闘もやらなければならぬのですから大変です。二〇ミリでも駆逐艦の胸腹に穴が開けられる。

弾倉には曳光・徹甲・炸裂弾などをいろいろ弾を組み合わせて込めてある。B 29は七・七ミリ機銃でははじき返された。飛行機の弾は大体二百メートルくらいの所で集まるようにしてある。あまり遠方から撃つても、飛行機が通過してしまふから、そういうように照準をして整備をしました。二百メートル以内で勝負をしなければならぬ。

我々の仕事は零戦の飛行機機体、兵器重火器、爆弾みな整備をしなければならぬ。対B 29のときは三〇キロのを積んで行って、投下して何秒かで破裂するよう信管が切つてあり、それを編隊を組んでいるB 29の中で爆破させる。しかし、なかなか近寄れないのです。

話が戻りますが、昭和二十年一月、高等科兵器整備術練習生となって、州の崎海軍航空隊へ入隊したとき

に豊川へ行つたのです。自分では親に対しても私信は出せませんでしたので、学徒動員の女学生に依頼をしたのです。

航空隊は、朝早くから訓練でブンブン飛ぶ、一機に将校一人、下士官何人、兵何人で飛行機を受け持つ。練習機には練習機の兵器員がおり、爆弾関係は爆弾の兵器員がいる。一機飛ばせるためには何人も人がついているわけです。どういう任務では燃料をどのくらい積むかなど、また機械の調整をする。最後は搭乗員がそれを調べるわけです。

玉砕地などで先に帰るのは、飛行機が無くなれば我々には必要がないので撤退するのですが、硫黄島で川西の人は玉砕したので、後に親元へ行き状況をお知らせしたこともあります。辛かったものです。

戦後は千葉県香取にて、列車で福山へ帰りました。干飯と被服を持って、給料二百円くらいもらい、二十一年十二月二十日残務整理の上、引き渡して復員しました。戦後はバラバラになったので戦友会はありません。中には記憶が無くなったのか、思い出すのが嫌なのか、

話にならない人もいました。

戦後は帝都防衛でしたので、航空機の兵器などを取り外したりし、兵隊は早く帰った。また、連合軍は特攻機を警戒していたため、航空隊は早く帰されたとも聞いております。家の方は大丈夫でしたので一年は農業をし、県警に入つたのですが二年で辞めてしまいましたので公務員の資格は無いのです。

当初はサイパンかニューギニアというのが、硫黄島、トラック、サイパン、硫黄島と航空隊勤務となりましたが、全部が玉砕地でした。航空整備ということで玉砕を免れ、本土防衛で千葉県の茂原、香取と勤務しました。我々が整備した航空機の搭乗将兵で戦没者は多数でした。また、クエゼリン、南洋群島、硫黄島の防備隊のほとんどは玉砕しています。陸、海軍人ばかりでなく民間人も多数死にました。島嶼での生活も戦務も、大陸や大きな島でのそれとは異なつて、常に孤独な日々の連続でありました。私は五十何年前のことを思い、今日ある幸いを強く感じております。一度ならず死を覚悟したことのある私ですから。

ビルマ野戦航空分廠

苦難の家族を想う

岐阜県 澤田賢三

私は現在の岐阜県関市吾妻町という所で盲目の両親のもとで大正十一年九月三日、長男として出生しました。父は若いときに学生がさしていた傘の骨が眼に刺さり両方共に眼球をなくしてしまつたといひます。母は農家で生まれ養蚕など手伝いをしていたのでしようが、当時の農家の子供は、今では考えられないようなことですが、栄養も取らず働き続けたようので、栄養失調のため失明したと聞いています。

大正十四年の十月ころ、私が満三歳のとき、岐阜市春日町へ出て借家住まい、父はマッサージで生計を立て、母は盲目でしたから、私が父の杖代わりとなつて、あちこちへ付いて回りました。私は妹、弟の長兄ですので、家庭のことをやりながら高等小学校卒業まで家